

ディケンズと靴墨 (上)

佐々木 徹
Sasaki Toru

11歳のチャールズ・ディケンズ少年は家計が逼迫したため、靴墨工場に働きに出された。靴墨の瓶にラベルを貼る仕事だった。やがて父親は借金がかさんで逮捕され、「わしにとって太陽は永遠に没した！」と捨て台詞を残して、マーシャルシー監獄に送られた。ほかの子供と同じように学校に行くものだと思っていたチャールズは、なぜこんなことになってしまったのか理解できなかった。家族は全員父親と共にマーシャルシー監獄の中に移り住んだが、チャールズは一人で下宿暮らしをした。彼は両親に見捨てられたと思った。このような生活は一年あまり続いたと考えられる。¹「これらの経験は精神的なトラウマとなり、ディケンズはそのせいで一生涯苦しみ続けた」とエドモンド・ウィルソンは述べ、「気概のある男が、組織としての社会の残酷さによって少年時代を破壊された場合、彼の取りうる自然な態度は、犯罪者のそれか、反逆者のそれかのどちらかである。ディケンズは想像力の中においてその両方の役割を演

¹ もっとも新しいマイケル・アレンの研究によれば、それは 1823 年 9 月から 1824 年 9 月または 10 月まで続いたらしい (94)。

じ、死ぬまでそれらの中に自分の感情のもっとも強い部分を注ぎ込むこととなった」と言う (119, 127)。

ウィルソンの結論はいささか乱暴であり、にわかには同意しがたいところがあるが、この「傷」がディケンズの想像力に大きな影響を与えた、決定的な事件であったという点は間違いなからう。ウィルソンのこの名高い評論を翻訳して以来、靴墨工場体験はずっと僕の頭にあって、ここしばらくこれがディケンズ小説にどのような形で現れているのか考えながら彼の作品を読んできた。考えたことの一部は既に論文にして発表している。²

今年ディケンズ生誕 200 年にあたるため、それを見込んで昨年あたりからイギリスでディケンズの伝記が何冊か出版されている。その一つがロバート・ダグラス＝フェアハーストの『ピカミング・ディケンズ』で、ジョン・サザランドはこの本に大変好意的な書評を寄せた。

ダグラス＝フェアハーストの『ピカミング・ディケンズ』は、ディケンズという驚嘆すべき人物がいかに形成されたかを考察する。彼はその過程における、決定的な瞬間をいくつか指摘する。原体験となるのが靴墨工場のエピソードである。それは「単なる人生の一コマではなく、不動の中心点だ」。これはディケンズ伝の標準的な出だしである。(中略)しかし、本書を一味違うものにしてしているのは、ディケンズの全作品中にある **black** や **blacking** の痕跡を彼が探偵のように発見したという点だ。ディケンズの傷はありとあらゆるところで膿を出している。私は『ニコラス・ニクルビー』を何

² 拙論「近代的ディケンズ批評」を参照。本稿はこの論文と僅かに重複する部分がある。

度も読んでいるが、「背中の曲がった病弱の子がほかの子と一緒に遊べず、靴墨の瓶に入れた花を眺めている」という箇所
所に注意を払ったことは今までなかった。(14)

この書評を読んだ時には、大いに興味をそそられた。という
か、ぎょつとした。ディケンズのテキストにおける **black** や
blacking の痕跡の追究こそ僕がここしばらくやってきたこと
だったからだ。しかも、拙論「近代的ディケンズ批評」では、
サザランドがこの書評で言及している『ニクルビー』の子供に
ついて取り上げて論じたのである。そういうわけで、僕は『ビ
カミング・ディケンズ』をこわごわ手に取った。目利きのサザ
ランドがこれほど褒めるのだから、どんな賢いことが書いてあ
るのか、拙論など吹き飛んでしまうのではなからうか、と心
配になったのだ。しかし、「探偵のように発見した」という評
言から予想されるほど、ダグラス＝フェアハーストは **black** や
blacking のめぼしいサンプルを拾い出しているわけでもなく、
テキストの新たな読みも披露していなかった。彼はこう結論す
る――

このような文脈で見ると、ディケンズがウォレンの靴墨工場
にちらっと言及する癖は強迫性の反復というよりも、お決ま
りのギャグを連発しているとか、うずうずする創造力に愉し
いはけ口を与えているような感じに近い。ちょうどヒッチコ
ックが彼の映画に一瞬顔を出すようなものだ。(38)

最初読んだ時、これはおかしいと思った。ヒッチコックの顔
や体つきは観客によく知られているのに対して、ディケンズの
靴墨工場の経験は、それについて記した「自伝的断片」を見せ

た相手、彼の友人であり伝記作家のジョン・フォースターしか
知らない秘密だったからである。しかし、おそらく、ダグラ
ス＝フェアハーストが言いたいのは、靴墨工場について知っ
ている今日の読者は、ディケンズ作品の中で靴墨に出くわした
時、ヒッチコック映画を見ていて監督が画面に登場してきた時
と同じ経験をする、ということなのだろう。それならわかる。
実際、そのような観察は既にマイケル・スレイターも行ってい
る。1868年、二度目のアメリカ訪問を行った時、ディケンズ
はおふざけで友人二人の徒歩競争を企画し、それについての文
章を残している。ディケンズはここに「プライベート・ジョー
ク」をもぐり込ませているとスレイターは言う。それは「ニュ
ートン・センターというところがゴールで、途中競技者には飲
食物はオレンジ五個と靴墨一瓶しか与えられない」という部分
である。以下、スレイターの説明を聞こう。

このビラのような、一見すぐに消えてしまいそうな書きもの
にでも――ただしディケンズはそれが友人によって保存され
後世に受けつがれるのを期待したかもしれない――彼は「時
間差言及」とでも呼びたい仕掛けを意図的に導入した。その
痛々しい意味合いは、彼の死後何らかの形で出版されるよう
明らかに意図されていた「自伝的断片」を読んだ人のみが理
解できる。この場合、瓶はメッセージを入れる容器ではなく、
瓶自体がメッセージなのだ。(581)

まったくその通り。この現象の説明としてダグラス＝フェア
ハーストよりも当を得ていよう。³ しかしながら、スレイター

³ 奇妙なことに、ダグラス＝フェアハーストはスレイターの伝記に
まったく言及していない。

の本も、ダグラス＝フェアハーストの本も、基本的には伝記だから、テキスト中の **blacking bottle** 等への言及を拾う以上に踏み込んだことはしていない。それを試みているのが、ローズマリー・ボーデンハイマーである。彼女は以下に引く『デイヴィッド・コパフィールド』の多分に自伝的なパッセージ(マードストーン・アンド・グリーンビー商会はウォレンの靴墨工場に相当する)――

それがどれだけの長さであったにせよ、マードストーン・アンド・グリーンビー時代に、私は子供がするゲームやスポーツにまったく親しんでいなかったから、[ストロング氏の学校に上がった時] 子供としてごく当たり前のことが経験不足で不器用にしかできなかった。(中略) 私がキングズ・ベンチ監獄に大変なじみがあるということを知ったらどう思うだろう、ミコーバー一家のために質屋に行ったり、ものを売ったり、彼らと一緒に夕食をとったりした――彼らとのそういう関わりを期せずして暴露してしまうような何か自分が自分にありはしないか、私はそれを心配した。(第16章)

――について、これは靴墨工場の経験と〈知識〉という問題を直接的に結びつける重要な文章だと指摘する。その書名にあるように、ボーデンハイマーは **knowing**, つまり、知識を得ること、あるいは知識を得たことによる抜け目のなさにこだわる。そして、ディケンズが「読者にそうとは明言しないまま靴墨工場について語る」のは「その内実を決して明らかにはできない〈知識〉に関する恥辱とプライドの両方を伴って、ディケンズが読者を相手に作家人生の初めから終わりまでずっと行っていたゲーム」だと言う(19)。しかし、ディケンズと靴墨につい

てボーデンハイマーがすべてを言い尽くしてしまったわけではないし、彼女もダグラス＝フェアハーストもスレイターも言及していないサンプルはまだいくつもある。本稿ではそれらについて考察してみたい。初めに強調しておくが、僕の関心は単にテキスト中の靴墨に関する言及を収集することにあるのではない――そうではなくて、靴墨工場の経験に端を発すると思われる一連のモチーフがいかに関わり合われ、いかに機能しているかを探ることにある。

ディケンズが靴墨体験を初めて本格的に自分の作品に取り入れたのは『オリヴァー・トゥイスト』である。よく知られているように、この小説の悪党の名前は靴墨工場で親切にしてくれた少年ボブ・フェイギンに由来する。この優しい少年がディケンズの想像力の中でグロテスクな犯罪者へと変容したのは、彼が労働者階級への転落という恐怖を体現していたからだと考えられる。ディケンズはこの少年の善意について「自伝的断片」の中で語っている。ある日、チャールズ少年が脇腹にひどい痛みを覚えると、ボブ・フェイギンは靴墨の瓶にお湯を入れて痛いところにあてるなどかいがいしく看護してくれる。そして、工場が退けた後も、心配だから家まで送って行こうと申し出る。

私は自尊心ゆえに彼に監獄のことを知られたくなかった。何度か振り切ろうとしたが、善良なボブはまったく耳を貸さなかった。結局サザーク・ブリッジの南詰近くの家の階段で握手して別れを告げ、そこが自分の家だというふりをした。彼が振り返ってこちらを見るといけないので、お芝居の仕上げにドアをノックした。そして下女がドアを開けると、

ここはロバート・フェイギンさんの家でしょうかと尋ねたのだった。(フォースター、第1部第2章)

この箇所と不思議なこだまを交わすのが、『デイヴィッド・コパフィールド』の一つのエピソードである。デイヴィッドはドーラにプロポーズするため、彼女が滞在しているミス・ミルズの家を訪れる。だが、いざとなるとなかなか決心がつかず、玄関のドアの前で逡巡する。もしも下女が出てきたら、「ここは(バーキスをまねて)ブラックボーイさんの家でしょうかと尋ねてから、失礼しましたと言って引き下がるつもりだった」と彼は語る(第33章)。ディケンズはここで自分とボブの一件を思い出しているに違いない。こう考えた時、見逃せないのがブラックボーイとバーキスへの言及である。バーキスは一つの箱を大事に持っており、その中身は誰にも明かさず、しかもそれはブラックボーイ氏のものだという虚構を作り上げていた。ブラックという色、かたく守られていた秘密、家を間違いましたという嘘、といった要素はすべて靴墨工場時代の経験に連なるものである。こうした「ブラックボーイ」にまつわる連想にいったん敏感になると、『オリヴァー』と同時期に書かれたスケッチ、「マッドフォッグ協会第二回大会報告」において、「ブラックボーイと胃痛」(Black Boy and Stomach-ache)という名のパブに出くわす時、われわれはどきっとする。今見たように、「ブラックボーイ」はバーキス経由でボブ・フェイギンと靴墨工場の記憶につながっている。これに「胃痛」が加わると、いきおいボブ・フェイギンが優しくしてくれた時のチャールズ少年の「脇腹の痛み」が想起される(『ピックウィック・ペイパーズ』)に出てくる藪医者ボブ・ソーヤーなら、即座に

「脇腹の痛み」も「胃痛」も同じだと診断するに違いない。

また、「ブラックボーイ」は、『クリスマス・ストーリーズ』所収の「リリパー夫人の下宿」という小品に(性転換手術を受けて)登場する。下宿屋のおかみのリリパー夫人は、召使のソフィーについて、どれだけ言っても彼女が黒い顔をして出てくるので困るとこぼす。一方、注意されたソフィーは、なんとも珍妙な返事をする——“I took a deal of black into me ma'am when I was a small child being much neglected and I think it must be, that it works out.”ここで彼女が言うblackとは、その前にストーヴが言及されているので、靴墨ではなく、ストーヴを磨くのに使った黒鉛(blacklead)を指すと考えられる。とはいえ、ソフィーの発言の裏には、親に顧みられず靴墨工場に出されたディケンズ自身の姿が透けて見える。まずブラックボーイとの関連上、彼女が「やる気満々のソフィー」(Willing Sophy)と呼ばれている点は見逃せない。これはバーキスの有名な科白、“Barkis is willin'”を思い出させるからだ。あるいは、ディケンズが彼女の返事の中に「子供の時に親にかまってもらえなくて」というフレーズを忍び込ませているのも、靴墨工場への回帰を感じさせる。また、ソフィーの科白は先に引用したデイヴィッド・コパフィールドの言葉を思い起こさせる。ボーデンハイマーが論及していたように、デイヴィッド・コパフィールドはマードストーン・アンド・グリーンビー商会にまつわる過去、すなわち、ディケンズ自身の靴墨工場体験が外に漏れることを心配している。デイヴィッドが、そして、ディケンズが恐れるのは、まさにソフィーが言う〈子供の時に体にしみこんだblackが外に出てきてしまう〉というプロセスなのである。

「オリヴァーの魂に毒を注ぎ込み、彼の魂を黒く塗り、その色を永遠に変えてしまう」(第18章)——これがフェイギンの奸計のエッセンスである。もちろん、「黒く塗る」(**blacken**)とは「汚辱」を意味するわけだが、それはディケンズにとっては特別な響きを持つ言葉であった。この響きはディケンズ小説全体に広く行き渡る。たとえば、『大いなる遺産』。実は、本稿の視点から見れば、フェイギンとジョー・ガージェリーは近い親戚なのだ。この大それた意見を裏づけるためには、まず『二都物語』を見ておく必要がある。ディケンズの多くの監獄にまつわる物語と同じく、『二都物語』にも、父親の投獄と自らの靴墨工場に関する記憶が作用している。ドクター・マネットは長い間バスチーユに閉じ込められ、その時間を独房の中で靴作りをして過ごす。彼はいったん出獄し、普通の暮らしを送るが、ストレスが高じるとまた自分の部屋にこもって靴作りを始めてしまう。友人のロリーは心配になり、自分の知人にこんな病気の人がいるのだが、という建前でドクター・マネットその人に相談し、診断を仰ぐ。この時、ロリーが靴作りの作業を鍛冶屋の仕事に置き換えている点は注目に値する。ここには靴作り(**shoemaking**)→靴墨(**blacking**)→鍛冶屋(**blacksmith**)という連想が働いている。マネットは、手先が器用になったことで精神的な苦痛に対処できるようになったと説明するが、これが靴墨のラベル貼り作業に習熟していったディケンズ自身の経験から生まれた洞察であることは想像に難くない。また、マネットの講説の最後に出てくる「迷子になった少年の胸を襲うような突然の恐怖」(第2部第19章)というフレーズの中の「迷子になった少年」(**lost child**)は、親に見捨てられたディケンズ少年を思い出させるディテイルである。

これらを念頭において、ディケンズがこの小説の次に書いた『大いなる遺産』を考えてみよう。親のいないピップは義理の兄にあたる鍛冶屋のジョーに育てられるが、エステラという存在を知ると、労働者の生活から抜け出ることを切望する。

私が何を恐れていたか——それは、不運にも私がもっとも汚い、品のない格好をしている時に、たまたま顔を上げると、鍛冶場の木の窓の一つからエステラが覗き込んでいる、ということだった。黒い手と黒い顔の私がひどく体裁の悪い作業に従事しているのを、いつかエステラが見つけて嘲り笑うのでは、という恐怖に私は取りつかれていた。(第14章、傍点引用者)

この後、ピップはロンドンに出てジェントルマン修行をする機会を得る。そして、一度里帰りをした時、ジョーと別れ際に「手を拭わないで——頼むからその黒くなった(**blackened**)手で握手しておくれ」(第35章)と言う。そんな殊勝なことを言いながら、「すぐにまた来るから」という言葉とは裏腹に、彼はしばらくこの田舎の鍛冶場には近づかない(小説の終わりでもピップはジョーのもとに戻るわけではない。彼の世界は所詮ジョーとは別のところにある)。ここでフェイギンの奸計を思い出そう。先に述べたように、優しいフェイギン少年が極悪人フェイギンに化けたのは、二人が共に、社会の下層へディケンズを引きずり下ろそうとする力——〈彼を黒く塗る力〉——を象徴していたからだった。この点において『大いなる遺産』のジョーとピップの関係は、フェイギンとオリヴァーの関係に似ている。いささかショッキングなことだが、一つの重要な側面において、ディケンズの想像力の中で、心優しい良きキリスト教

徒のジョーは悪党フェイギンと双子の兄弟とは言わないまでも、従兄弟ぐらいの血縁関係にあるはずだ。

(本稿は 2012 年 5 月 27 日専修大学で行われた日本英文学会第 84 回全国大会での研究発表に基づく。)

〈参考文献〉

- Allen, Michael. *Charles Dickens and the Blacking Factory*. St. Leonards: Oxford-Stockley, 2011.
- Bodenheimer, Rosemarie. *Knowing Dickens*. Ithaca: Cornell UP, 2007.
- Carrow, G.D. "An Informal Call on Charles Dickens." *The Dickensian*. Spring 1967: 112-19.
- Collins, Philip. *Dickens: Interviews and Recollections*. London: Macmillan, 1981.
- Dolby, George. *Charles Dickens As I Knew Him*. London: Fisher Unwin, 1885.
- Douglas-Fairhurst, Robert. *Becoming Dickens*. Cambridge: Harvard UP, 2011.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens. 1872-74*. London: Cecil Palmer, 1928.
- James, Henry. Review of *Our Mutual Friend*. Ed. Philip Collins. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1971.
- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Dombey*. 1965. New York: Norton, 1985.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven: Yale UP, 2009.
- Sutherland, John. "A Tale of Two Dickens." *Literary Review*. October 2011: 13-14.

ヴィンセント・ファン・ゴッホ『ファン・ゴッホ書簡全集』二見史郎訳 (みすず書房、1969-70)

エドモンド・ウィルソン「二人のスクルージ」『エドモンド・ウィルソン批評集 2 文学』中村絃一・佐々木徹・若島正訳 (みすず書房、2005)

佐々木徹「近代的ディケンズ批評の源流を温ねて——ミラー、マーカス、リーヴィス」、塩谷清人・富山太佳夫 (編)『イギリス小説の愉しみ』(音羽書房鶴見書店、2009)

(京都大学教授)